

第8回麻布大学学術展示「願えば叶う：増井光子展」の記録

The exhibition “A Dream Will Come True: Memories of Dr. Mitsuko Masui”

高槻 成紀¹, 堀 浩²

¹麻布大学獣医学部・動物応用科学科, ²アジア産野生生物研究センター

Seiki Takatsuki¹, Hiroshi Hori²

¹ Department of Animal Science and Biotechnology, Azabu University, ² Asian Wildlife Research Center Foundation

Abstract: Dr. Mitsuko Masui, a great veterinarian and an influential zoo leader who graduated from Azabu University, passed away in July, 2010. She leaves behind many accomplishments, the fruits of her activities at zoological gardens. A memorial service was held at the campus festival in 2010 by the alumni association of Azabu University. In August, 2011, a collection of memorabilia and documents of Dr. Masui were donated to Azabu University. Following receipt of these, a memorial exhibition was held. The exhibition was composed of five corners. Corner 1 displayed Dr. Masui's pre-Azabu University period. Corner 2 showed items related to her studies at Azabu University. Corner 3 exhibited items connected with Dr. Masui's tenure at Ueno Zoo, where she began her career as a zoo veterinarian. Corner 4 exhibited items connected with her work at other zoos. She became a well-renowned zoologist and worked as the curator of several zoos. Corner 5 exhibited a part of her collections and explained what she wished. Besides the exhibition, we published a publication in her memory bearing the same title.

Key words: animal sketch, Azabu University, giant panda, Mitsuko Masui, Ueno zoo, veterinarian, zoo, Zoolasia

はじめに

2010年7月、麻布大学の卒業生であり、動物園の活動で偉大な足跡を残した増井光子先生が逝去された。麻布学ではその年の大学祭で同窓会が中心になって追悼集会を行ったが（高槻, 2011）、翌2011年、大学祭をはさむ10月28日から12月25日の期間、「願えば叶う：増井光子展」と題する学術展示をおこなった。これは、それに先立つ2011年8月にご遺族から麻布大学に遺品が寄贈され、また増井光子基金が発足したことを記念したものである。本稿はその記録である。

経緯

2011年7月に高槻を中心に堀浩、兵藤哲夫氏、中馬昌平氏が集まって展示をおこなうことを決めた。コ

ンセプトとしては増井先生の麻布大学時代以降のヒストリーをたどり、その意義を来訪者、とくに本学の学生に学んでもらうものとした。このとき、併せて記念追悼文集を編集することも決め、執筆依頼を送った。

10月11日に丸茂一美氏（株式会社マルモ）と展示の打ち合わせをした。高槻がポスターをデザインした（資料1）。

展 示

展示は趣意書（資料2）に続いて、以下の5つのパネルに、時代を追って記述をした。各パネルの上部の色を違えることで時代の変遷を象徴的に表示した（図1）。展示文章は縦書きとした。展示物は黒色の台にのせることで統一感を出した。またスケッチ原画は展示コーナーの外に古い机を置き、その上に並べることにした（図2）。



図1 展示会場のようす

1 麻布大学時代以前

このパネルには増井先生が動物園で来園者にマイクで解説している写真を示し、増井先生の動物園人としての姿を象徴した(図1)。以下は展示文章である。

増井光子は昭和12年(1937年)に大阪に生まれた。石鹼生産をする豊かな家庭に育ったが、ふつうの女の子のように人形で遊ぶというようなことには興味がなく、生き物に特別に関心を示したという。それは犬などのペットだけでなく、ゴミ捨て場のハサミムシなど、大人は汚いといって敬遠するような生き物に対しても注がれた。時代は太平洋戦争へ突入する前夜であるから、戦時色が強まっていた。光子自身の記録によると、幼稚園のときに動物画家になりたいと思っていたようである。物心がついた頃はすでに太平洋戦争の渦中にあり、戦災の危険があったので小学二年生のとき(昭和20年、1945年)に生駒山の山麓(現在の東大阪市)に疎開した。大阪市内と違って自然が豊かであり、光子少女は生き物に接しながら育った。光子自身が語るところによれば、それまで内気でさえない少女だったが、疎開してからは活き活きとした積極的な子供になったという。そして小学生の頃にはすでに動物学者になることを夢見、高校生になると獣医師になることを決意したという記録がある。ただし記録によって多少の違いがあり、学者と獣医師の希望は峻別されたものではなかったと思われる。しかし高校生の

ある段階で日本犬研究会の板垣四郎先生にあこがれて、板垣先生が学長である麻布獣医科大学に入学を希望する。決意するや単身で上京して受験手続きをとる。当時の大阪と東京の遠さは今では想像もできないほどであった。このあたり、その後の人生で示される意志の強さと行動力の萌芽が読み取れるようである。

このコーナーには齧歯類と翼手目の交連骨格標本を展示した(図1)。

2 麻布大学時代

このパネルには卒業アルバムと増井先生のエッセーなどをもとに、大学時代の活動を記述し、卒業アルバムから在学時の増井先生の写真などを紹介した(図2)。以下は展示文章である。

増井光子は昭和30年(1955年)、麻布獣医科大学・獣医学部に入学を果たす。好きな動物学であるから、水を得た魚のように勉学には意欲的に取り組んだ。当時は100人あまりの学生のほとんどは男子であり、女子学生は二人だけであった。増井光子は日本で2番目の女性獣医師となったといわれる。もともとはイヌに興味があったのだが、大学でさまざまな動物に接し、関心を拡げて行った。大型動物の実習にも積極的に取り組み、ウシの直腸に腕を肩近くまで入れているのを見て、ほかの学生が目を丸くしたという逸話がある。入学前からさまざまな動物に親しんでいたが、ウマに



図2 麻布獣医科大学時代のコーナー



図3 上野動物園時代のコーナー

は接したことがなかったので、大学でみたウマには強く惹かれたようだ。馬術部員がいやがる厩舎の作業を買って出て精を出した。当時ウマは三頭飼われており、増井は朝、大八車で大学周辺の青草を100kgほども刈ってきた。ススキなどは皮膚を傷つけるから、チカチカしたらしい。それからウマを運動させたり、寝ワラを干したり、馬糞を片付けたりとたくさんの作業をこなした。こういう作業を通してウマの行動や個体ごとの性格などを学んだ。

学生時代の増井は勉学一筋で服装も質実、当時、女学生はほとんどがスカートをはいていたが、増井光子はいつもズボン姿であった。勉学のかたわら、馬術部と剣道部にも属し、これらも一流であった。ウマへの関心は生涯一貫したものであり、後年「ウマのマラソン」と呼ばれるエンデュランス競技での活躍につながるし、在来馬の保全、競馬鑑賞も継続した。学生時代には、さらに英会話の勉強のために横浜に通っていた。これも将来、動物園で勤務し、国際的な交流があることを想定してのことだったらしい。

当時獣医学部は四年制であり、研究室はあこがれの板垣教授（当時学長）の臨床学研究室に属した。4年生の夏には40日間、休むことなく動物園で実習をした。その勤勉さは動物園にも印象を残したようである。こうして心おきなく動物学を学び、充実した四年間を過ごして、昭和34年（1959年）に卒業した。

このコーナーには「麻布獣医科大学」の学札と木造校舎時代に講義の開始、終了に使われた鐘を展示した（図2）。

3 上野動物園時代

このパネルには残された写真や雑誌などに掲載された写真を紹介した（図3）。

増井先生が卒業後上野動物園に無給で働くことになったことはよく知られるエピソードで、それを軸に写真などを交えて記述した。以下は展示文章である。

昭和34年（1959年）、卒業と同時に東京都恩賜上野動物園に勤務する。当時、女性の獣医師はほとんどいなかったもので、増井の勤務には反対の声が多かったという。当時の上野動物園の園長は古賀忠道氏で、動物園界に大きな影響力があった。古賀氏は周囲の意見に対して、「だって君たち、やらせてみなきゃ、だめかどうかわからんじゃないか」と言い、その一言で勤務が始まった。このエピソードは、その後動物園長になった増井自身がおりにあるごとに語っている。増井は古賀園長のこのことばに恩を感じ、「これに応えなければ、人間として失格だ」と自分を鼓舞していたようである。

初めての女性の動物園の獣医師ということで社会からも注目された。大きな仕事として、ジャイアントパンダの人工繁殖の成功がある。昭和40年代は日本が経済復興を果たし、田中角栄内閣の時代に日中の国交回復（1972年）が果たされた。そういう流れの中で中国政府からパンダが贈られ、日本中が「パンダブーム」に湧いた。そうした中でファンファンの人工繁殖が成功し、これに増井光子が果たした役割が大きかった。この頃、動物園内の動物の行動観察や、宮城県

タスキ、岡山県のオオサンショウウオの調査など、野生動物の研究も手がけている。また、昭和46年(1971年)頃にアフリカ訪問し、野生動物の観察をしている。このように従来の動物園の獣医師とは違う活動をしている点が注目される。

一方、動物園で死亡した動物を丁寧にスケッチしていた。今回寄贈された遺品の中に当時のスケッチが遺されていた。その作品は非常にリアルで、たとえばガリガリに痩せたライオンはその痩せた状態がそのままに描かれている。また皮を剥いだあとの筋肉の描写や、内臓のスケッチもある。さらに足の跡をスタンプで写し取った記録もある。こうした徹底的な記載は増井光子の動物学に対する姿勢を示している。こうした活動は忙しい勤務外におこなわれたと推察される。

驚くべきことに、40歳代になってからジョギングを始め、その後マラソンにも挑戦するようになる。このように上野動物園時代の増井光子の活動は超人的といえるだろう。

このコーナーには本学所蔵のゾウの鼻のプラスチックネーションの一部を断片的に示した。これは増井先生が上野動物園に就職し、取材を受けたときの写真が2頭のゾウのあいだに立っていたものと連関しており、展示効果があった(図3)。また動物の観察記録も展示した。

4 動物園人として

この時代になると写真はカラーになるが、全体の統一を考えてモノクロで紹介した(図4)。以下は展示文章である。

増井光子の動物園人としての活躍は上野動物園で始まり、大きく開花したが、その後も、昭和63年(1988年)に井の頭自然文化園の園長となり、獣医師としてだけでなく、動物園を司る立場としての活躍を始める。そして2年後の平成2年(1990年)には多摩動物公園園長となった。その後、平成4年(1992年)には古巣の上野動物園に園長として迎え入れられることになる。平成8年(1996年)から三年間は麻布大学獣医学部教授となるが、平成11年(1999年)には「よこはま動物園ズーラシア」の初代園長となり、再び動物園人にもどる。この動物園は生息地を重視した構造をとる、新しいタイプの動物園であるが、その運

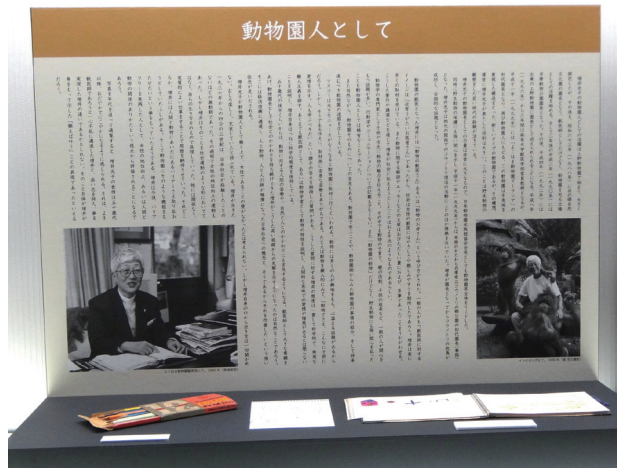


図4 動物園人としてのコーナー

営に増井光子が果たした役割は大きい。このことは野生動物の観察をした若い時代の経験が活かしている。

増井光子の動物園長としての力量は非常に大きなもので、動物園界全体をリードした。

同時に野生動物の保護にも強い関心を示し、平成11年(1999年)からは、本務のかたわら兵庫県立コウノトリの郷公園の初代園長(兼務)となった。増井光子は地元関西でのコウノトリ復活の活動にこのほかに情熱を注いでいた。増井が園長となってからコウノトリの放鳥が成功し、全国的な話題となった。

動物園の獣医師となった増井には「動物の獣医さん」あるいは「動物のお母さん」という呼び方がされた。一般の人がもつ獣医師に対するイメージは「近寄りたたいお医者さん」であったから、社会は女性の獣医師にはやさしさや親しみやすさを期待したのであろう。そして取材者は実際に会って見たときの、増井の動物と仕事に対するひたむきな姿勢に好感をもったように、増井は実に多くの取材を受けている。また動物に関する解説やエッセーなどの文章はおびただしい量におよび、多筆であったことをうかがわせる。こうした著作や講演などを通じて増井が社会に伝えようとしたことはおよそ次のようなものであるらしい。

動物学の専門家として子供や市民に動物の魅力を伝えるもの。その中でも動物の子育て、親の役割、子供の成長など、一般の人が関心をもつ話題が多い。行動学やコミュニケーションについての記載も少なくない。また「動物園の動物」だけでなく、野生動物にも強い関心を払ったことも当時の動物園人としては稀有

なことであった。

また当然ながら、動物園そのものについての言及もある。動物園で学ぶことや、動物園側からみた動物園の事情の紹介、そして将来進むべき動物園の道筋を示している。

マスコミは大きなニュースがなくなると動物園に取材に行くといわれる。動物には多くの人に興味をもち、心温まる話題があるからだだろう。しかし、そうであるゆえに、取材側に安易な姿勢もありがちである。たとえば動物を擬人的にみて、「動物でさえ、こんなに子供に愛情を示す。人も学ぶべきだ」という調子の答えを期待した質問がある。こうした質問に対する増井の態度は一貫して科学的で、無用な擬人主義を排す。あくまでも獣医師として、あるいは動物学者として動物の特性を説明し、人間的な意味での愛情や憎悪があるとは限らないことを説明する。対談などでは、相手が一方的に人間中心の解釈をする例もあるが、増井自身はつねに科学的態度を保持している。

50歳代の後半くらいからは、動物に対する人間の姿勢や、自然と人とのかかわりにも言及するようになる。獣医師として大きな業績をあげ、動物園長として社会とのかかわりを持ち続けてきた増井がこうした高い視線からの見解を示すようになったのは自然なことであろう。そこには経済復興に邁進し、人と動物、人と人の絆が稀薄になった日本社会への懸念と、そうであるからそれを改善したいという強い信念が見いだされる。

増井光子が動物園人として働く上で、女性であることの壁がなかったとは考えられない。しかし増井自身の口から泣き言は一切聞かれない。むしろ楽しく、充実していたと語られている。増井が生きた1937年からの四分の三世紀は、日本社会が経験したことのないほどの激動期であった。その過程で女性の地位向上の運動もあった。しかし増井はそのことを社会運動のような形においてではなく、自らの生き方そのもので具現していった。性には関係なく、実質的によい仕事をする事で周囲を納得させていった。男であるか女であるかさえ、動物に向き合うということにとってはさほどの意味をもたないかのごときであった。それどころか、増井には人間と動物にあいだにあるバリアさえ取り払おうとしていたふしがある。そして動物園にそのような機能をもたせたいという夢をもっていたよ

うである。増井は今後、バリアフリーを実践した人として、女性の地位向上、あるいは人間と動物の関係のありかたという視点から評価されることになるであろう。

写真を年代順に通覧すると、増井光子の表情は50歳代以降、おだやかでにこやかになるように感じられる。それは、よき獣医師であろうと一心不乱に邁進した増井と、高い志を持ち、夢を実現した増井の違いであるかもしれない。そのこと自体が増井が身をもって示した「願えば叶う」ことの具現であったといえるだろう。

このコーナーには色鉛筆とスケッチブックを展示した(図4)。

5 増井光子が求めたものと遺品

遺品の中にさまざまなコレクションがあった。いずれも多かれ少なかれ動物に関係したもので、切手、玩具、馬具などもあった。これらのうち、一部をとり上げて展示した(図5)。すなわちダチョウの卵、マッコウクジラの歯(図6A)、貝殻、翡翠(図6B)である。

増井光子の生涯を通覧すると、その生涯は動物に対する関心と愛情で一貫していたといえるだろう。幼い頃の遊び、学校での勉強、大学での勉学もすべてその線上にあった。そして、文字通りそれを具現する職業として動物園の獣医師となった。そして園長という立場となってそのことを社会に発信もした。一方、これらとは一見別のことのように思われるマラソンや根付



図5 遺品コーナー

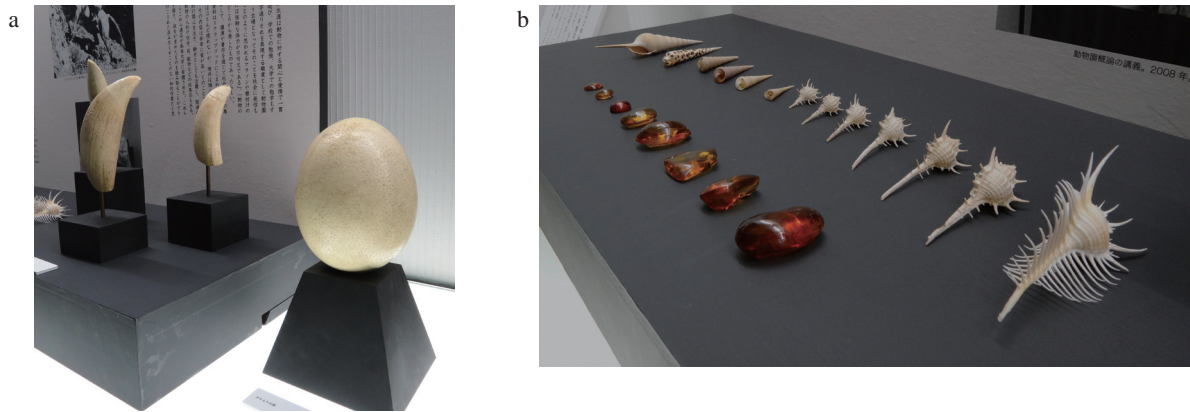


図6 A ダチョウの卵とマッコウクジラの歯, B 貝殻と琥珀

けのコレクションなども、「動物園人には強靱な体力が不可欠である」、「動物のことなら何でも知りたい」というところから発したものであったらしい。

増井は職業としての動物園人として、講演や著作を通じて社会に生命の尊重を発信し続けた。その膨大な資料はスクラップブックにこまめに整理されている。一方、そうした記述にはほとんど現れないが、増井は個人として根付けのコレクターでもあった。その内容は非常に質が高いとのことである。また馬については公私とも格別の関心を注ぎ、騎手としても活躍し、関連のコレクションもある。さらに動物の人形や切手、貝、鉱物などの収集品もある。

2011年8月にご遺族からこれら遺品が麻布大学に寄贈された。これらの資料の中から増井光子像を描き、彼女が求めたものを読み取ることができるだろうか。それは後進に残された汲み尽くすことのない知的作業だと思われる。

スケッチ

遺品の中に増井先生のスケッチがあった。とくに上野動物園時代に死体を詳細にスケッチしており、かなりの紙数があった。この中から数枚をとりあげて紹介した。木製の古い机にスケッチを置き、ガラス板を置いた(図7)。

最後に

増井先生の遺品のほとんどが卒業校である本学に寄贈されたことは本学にとってたいへんに光栄なことで



図7 スケッチを展示した机

あった。その内容は多岐にわたり、数も多い。今回の展示では未整理の遺品から展示に直結するものだけを取り上げたが、今後はこれを整理し、分析することで、増井先生の偉業を把握することが必要である。それは本学に課された価値ある課題だと思う。

追悼文集

これに連動させて追悼文集「願えば叶う」を作成した(図8)。内容目次は以下の通りである。

学生時代の増井さん	渡邊千代子
動物園人としての増井さん	中川志郎
恩師としての増井光子先生	西本奏子
女性初の動物園長であった増井先生	
一学生の皆さんへのメッセージ	村田浩一
コウノトリの郷公園長としての増井光子先生	
	三橋陽子



図8 追悼文集「願えば叶う」の表紙。撮影 堀浩

増井先生またあいましょう一人馬一体

中馬昌平

先輩、また友人としての増井先生 堀 浩

麻布大学にとっての増井光子先生 政岡俊夫

引き継ぐもの—あとがきに代えて 高槻成紀

文集は展示来訪者に配布した。1000部を作成し、2011年12月時点でおおよそ800部を配布した。

アンケート

これまでの学術展示と同じ以下の5つの質問をした。

1) あなたの所属はなんですか(複数可), 2) 麻布大学学術展示をご覧になったのは何回目ですか, 3) 今回の学術展示の内容はいかがでしたか, 4) この展示方法についていかがでしたか, 5) 学術展示の開催時期についてどう思われますか。これらは選択式とした。

それらの結果を図9に示す。来訪者の所属は半数ほどが本学関係者であった。ただし教員からの回答はなかった。大学祭の時期に開催したことを考えると学外者が少なかったと思われる。来訪回数は初めてが約半数であった。評価は高く、「良い」と「とても良い」で4分の3を占めた。展示方法についても概ね好評で

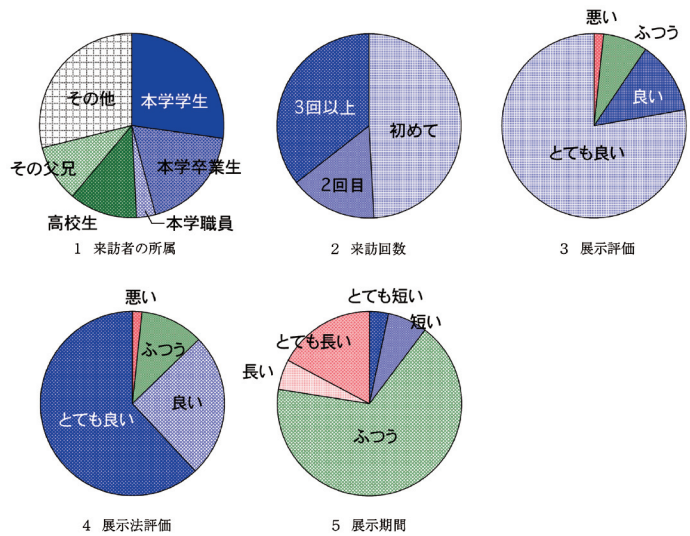


図9 アンケート結果

あったが、展示内容よりは「とても良い」が少なかった。これは展示空間が狭いこと、一面だけであるために、展示に多様性を持たせにくいことによるものと考えた。展示期間は「ふつう」が6割ほどであったが、「長い」も「短い」もあった。

このほか自由に感想を書いてもらった(資料3)。それらはある程度整理すると次のようになった。最も多かったのが、増井先生自身に対する賞賛であった。また、スケッチに感動したという意見も多かった。展示については、増井先生の人柄や業績がわかってよかったというものが多かった。もっと明るいほうがよいという意見もあったが、展示者としてはやや暗い空間と古い木の机を置くことで、少し古い時代の研究の雰囲気を出したかった。また作品の褪色に対する懸念もあった。しかし現在の多くの展示は非常に明るいので、そのような印象をもったのかもしれない。大学祭のときにこの展示をもう一度開催して欲しいという意見もあった。

謝辞：この展示はご遺族からの遺品が寄贈されてはじめて可能になったものであり、寄贈いただいた増井久代様に厚くお礼申し上げます。展示の企画では同窓生の兵藤哲夫氏、中馬昌平氏にお世話になった。展示では株式会社マルモの丸茂氏にお世話になった。アンケートの集計では麻布大学経営企画課(入試・広報)に集計して頂いた。文集の作成では寄稿者各位にお忙しい中、ご執筆いただいた。また株式会社プリックには作

成上むずかしい注文をしたが、了解してよい文集に
していただくことができた。政岡俊夫学長には展示から
文集作成にいたるまで全面的な協力を得ることができ
た。これらの皆様に厚くお礼申し上げます。

文 献

高槻成紀. 2010. 「故増井光子を語る会」で語られたこと.
哺乳類科学, 50: 238-239.

資料1 ポスター

第7回 麻布大学 学術展示

願えば叶う — 増井光子先生記念展示



1961

1985

1999

増井光子先生は昭和34年(1959年)に当時の麻布獣医科大学を卒業、その後動物園で活躍し、日本社会に動物の命への関心を深める大きな働きをされました。麻布大学では増井先生を記念して展示をすることにしました。

麻布大学
2011年10月28日から
12月25日まで
獣医学部棟1階
入場無料

資料2 趣意書

「願えばかなう ー増井光子展ー」趣意

現在獣医系の大学の学生の内訳は男女半々あるいは女子学生のほうが多いというところが多い。だが、これはほんの最近のことであり、女子学生は20年前にはずっと少なく、50年前には数えるほどしかいないというほど少なかった。そうした時代に増井光子先生は麻布大学に入学し、ほとんどが男子学生である中で勉強も実習も、さらには乗馬や剣道や英会話まで生き活きとこなし、「動物園の獣医になるんだ」という夢を実現していかれた。

私たちの誇る増井先生の有名なことばに「願えば叶う」というものがある。しかし時代背景を考えれば増井先生の「願う」ということがいかに純粹で真剣なものであったかは現代の私たちには想像もできないほどである。増井先生はその夢を次々と実現されたが、それを支えたのは超人的努力であり、また動物に対する限りないやさしさであった。

増井先生は昨年急逝され、私たちは大きな悲しみに打ちひしがれたが、母校である本学はその一周忌として、学術展示において増井先生の偉業を顧みることにした。

これを機に本学の学生が、増井先生の「願う」ということがいかなるものであったかを知ることは意味のあることだと思う。在学生、とくに女子学生は、増井先生の動物に対する真のやさしさがいかなるものであり、夢を実現するということがいかにきびしいものであるかを考える機会とすることを期待したい。

「願えばかなう ー増井光子展ー」実行委員会

高槻成紀（麻布大学獣医学部教授）
 兵藤哲夫（日本動物福祉協会理事）
 中馬昌平（神奈川県馬術協会会長）
 堀浩（アジア産野生動物研究センター代表）
 馬場国俊（野生動物ボランティアセンター）

資料3 アンケートの自由記述で寄せられた意見。

おもに増井先生自身を賞賛したもの：

- もう少し詳しくしてほしかった。私は先生を尊敬しています。イギリスで亡くなられたことを新聞で読んで大変悲しく思いました。
- 増井先生のお人柄と研究成果がよくわかりました。今後の展示にも期待しています。
- 増井先生にひたむきな生き方、研究心に改めて感動。女性として最高の生き方だと思う。亡くなられて残念でした。
- 増井先生がお亡くなりになられたのを改めてしりました。懂れて入学したので残念です。
- 1971年ケニア・タンザニアと一緒にサファリしました。その後、園長になられ、応援しておりましたが亡くなられて残念である。
- 増井先生に懂れて入学しましたが、会えなくて残念です。
- 学生のときに先生の特別講義で先生の教えを学ぶことができました。今の学生にも、もっと増井先生のことを知ってもらいたいです。
- 増井先生がお亡くなりなられましたこと、本当に残念です。貴重なお話をもっとお聞きしたかったです。
- すごい人だと思う。これからも大変な事をできる女医さんが育ててほしい。
- 生涯にわたり、動物と向き合う姿勢に感動を覚えました。すばらしいと思いました。

おもにスケッチを賞賛するもの：

- 写真と見れるようなスケッチがすばらしかった。
- 貴重な写真、スケッチを見られてよかったです。
- こうゆう絵が描きたい。
- 懂れていた増井先生の展示がみれてよかったです。経歴や写真は見知ったものが多かったですが、ご本人のスケッチ類は初めてみて感動しました。授業のスケッチのもっと真剣に取り組みたいです。
- 増井先生の人柄が伝わってくる内容の展示だと感じました。特に先生自身が描かれたスケッチからは鋭い観察力が伝わってきます。
- スケッチがすばらしかった。
- 増井先生のスケッチの展示も見れてうれしかった。
- 増井先生の動物の解体の絵はすごいと思いました。
- 実物を見て驚きました。

おもに展示についての意見

- 澄み切った秋晴れにめぐまれました本日、在学生、御来校者方々で賑わう校内を抜けますと、7階建ての圧巻の獣医学部棟へと導かれ、棟内の御展示の内容のやさしさに感動いたしました。遺族さえ知りませんでした経歴を御紹介いただき、感謝の極みでございます。1人でも多くの御皆様に御高覧いただけますことを祈念申し上げます。
- 大変すばらしく思います。
- 雰囲気をもっと少し明るく展示してほしかった。
- 毎年、学園際時に再展示してほしい
- もっと獣医学部の研究発表や、どんな勉強をしているのかなど、分かりやすくしてほしいです。私は将来獣医になりたいです。文集を読ませていただきます。
- 「願えば叶う」はとても興味深く読ませていただきました。次回があるならば、講演や授業のビデオも流してほしいです。